

「スピード感ある」英語を習得 「TOEFL Junior®」で実践力を 見極める熊本県立熊本高校

熊本県内有数の伝統校として知られる県立熊本高校（熊本市中央区新大江）。難関大への進学校としても名をはせる同校は、グローバルに活躍できる人材を育成することを目指しており、その一環で英語教育に力を入れている。「TOEFL Junior®」を導入し、生徒の実力を定期試験などの指標と関連させることで、英語力のさらなる向上を目指す。学校の特色や、TOEFL Junior®導入の経緯、狙いなどを併隆樹教頭と英語科の中田智子教諭に聞いた。 ※掲載内容は取材時点のもので



熊本県立熊本高等学校 <https://sh.higo.ed.jp/kumamoto/>

◆TOEFL Junior®とは◆

中学・高校生の英語力 (CEFR A2前半～B2後半) を測定する世界基準のテスト。英語で教え、英語で学ぶアカデミックな環境におけるコミュニケーション能力を正確に測るよう作られ、リスニング、リーディング、文法・語彙(ごい)など、基礎的な英語運用能力を幅広く測る構成になっている。テスト内容は、チリ、中国、フランス、韓国、日本など英語を第二言語として教えている国の基準や、米国の中学・高校英語学習者向け基準、経験豊富な言語測定専門家の提案、アカデミックな文献など幅広いソースに基づく。

測定分野は次の3つに分かれる。

- ① **Social and Interpersonal (社会的・対人的分野)** = 人間関係構築に使われる英語の範囲
- ② **Navigational (指示的分野)** = 学校関連のコミュニケーションに必要な英語の範囲
- ③ **Academic (アカデミックな分野)** = 学習時に必要な英語の範囲。

TOEFL Junior® Standardテストのリスニングとリーディングセクションの問題は、これら3分野で受験者の英語コミュニケーション能力を総合的に測定し、さらに、文法・語彙セクションで基礎知識を評価する。特定のカリキュラムに依存しない世界共通基準のスコアが出るため、英語学習の熟達度の現状把握と伸び率の確認に有効とされる。

(「TOEFL Junior®テスト公式問題集[改訂版]」2025, くもん出版より引用)



詳細は→ <http://gia-geet.com/>

社会に貢献する
「士君子」育てる

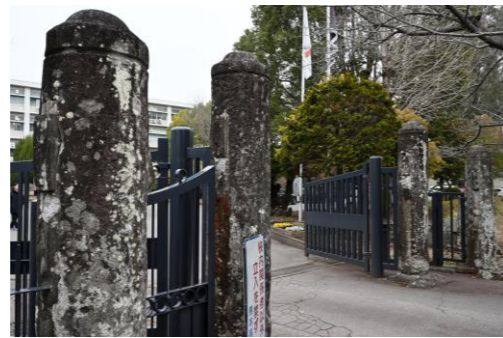
「学校の歴史や校風などを
教えてください。」

中田教諭…私はこの学校の卒業生ですが、2008年に教員として戻ってきました。生徒の個性を尊重し、自由な校風だと認識しています。教師と生徒との間柄が適度に近い、尊重し合っているという雰囲気があります。生徒も物おじせず意見を言いますし、授業はフランクで対等に付き合っている感じですね。

佃教頭…1900(明治33)年に熊本中学として創立し、2025年は125年目に当たります。校内でよく耳にするのは教育方針である「士君子(しくんし)たるの修養」という言葉です。「徳性・智能」、それを支える体力を備えた人物を養成し、社会に貢献できる人材を育てるというのが、基本の理念です。平たく言えば「ジェントルマンたれ」ということでしょうか。

「学校正門の門柱が特徴的です。」

佃教頭…明治時代中頃まで熊本城の前を流れる坪井川の橋脚を初代・野田寛校長が譲り受けたものです。



正門に使われている「下馬橋」の橋脚。「世に知られなくとも社会の礎たれ」との思いが込められている

「そうした校風の中で、英語教育をどう進められているのでしょうか。」

中田教諭…本校も私が来た当時はまだ昔ながらの受験校的に、訳読式、つまり日本語を英語に直し、英語を日本語に直す形が中心でした。それでも本校の独自教材とそれを中核にしたカリキュラムがあったので県内での成果は出ていました。

大学の外部試験が入ってくる構想が出てきたあたりから、方針を少し変えていく必要があったのでは、という意見が出てきました。大きく変わったのは新型コロナ禍直前の2019年ごろです。スピード感を持って読み、きちんと理解して、自分の意見を明確に発言する、という部分をもっと強くしなければならぬと、指導法、教材を再検討しました。本校独自の教材に加え、米国のナショナルジオグラフィックから出ている教科書を副教材として採用し、1年生の2学期ぐらいから2年生にかけて導入しました。もとも英語の教科書の1、2年生分を1年生から2年生の教科書の内容を2年生

の前期で終わらせ、後は独自教材を進めていました。加えて、英語コミュニケーションの授業を全て英語で進める「オールイングリッシュ」体制にしました。

「生徒たちに変化はありましたか。」

中田教諭…まずリスニングの力が以前よりもついてきた



授業は生徒同士でコミュニケーションを取りながら進められる

と思います。もともと実用英語検定（英検）を受験する生徒も多く、英検2級を2年生までで取得し、その後準1級、1級を目指すという感じでした。ただ、2級の幅というのが非常に大きいので、「この生徒は今、このくらい英語が使えますよ」という力を測る必要性さらに本校の実践的英語教育の検証をする必要性も感じて「TOEFL Junior」を導入することになりました。

「TOEFL Junior」を導入したのはいつからですか。

中田教諭…2021年度です。最初の頃は希望者受験でしたが、やはり全体で受けた結果を統計として見る必要があるということで、2024年度の新入生から全員受験に踏み切りました。1年生の7月と2年生の12月に実施し、各学年が2回試験を受ける形をとっています。

「英語で話せる力」が受験に直結

が、将来的なことや、留学時、大学入ってからのことなどを考えると、TOEFL Junior」を足がかりに、最終的には「TOEFL iBT」を意識させたいです。例えば英検準1級を取った子が次に目指す目標はどうしても英検1級になります。私たちがとしては、準1級まで来たのだから今度はTOEFL iBT」に挑戦してほしいと考えています。

TOEFL Junior」で英語の実力を客観的に把握

「意識の高い生徒だけでなく全員がTOEFL Junior」を受けていくことで、どのような変化を期待していますか。

下田教諭…東京大や東京外国語大を含めて今の入試に対応するためにTOEFL Junior」は有効だと思います。生徒が学習の目標として、「英検何級」などというのは別の軸に、「TOEFL Junior」で何点」と意識するのもあってよいと思います。

日々の授業で生徒と向き合っている松川清二郎教諭（3年生担当）、下田彰子教諭（2年生同）、渡邊利夫教諭（1年生同）にも加わってもらった。

「英語は文系・理系を問わず全教科を支えていく教科になっていくように感じます。位置づけはどのように変化していますか。

松川教諭…英語の教科指導は文系・理系で分けていません。意識の高い生徒は「理系でも論文は英語で書かなければならないから、しっかりと身に付けたい」と、考え方が変わっているように感じます。進路の大きな流れとして、1、2年生のうち英語の基礎を完全につくってしまおうことを目標にしています。

「2年生までに3年分の教科書を終わるといいますが、その後はどのような授業になりますか。

松川教諭…本校の独自教材を用いて英語の応用力を鍛えます。3年生後半では大

今後は定期テストや入試実績のデータとも関連させることで、おおよそこのレベルの子たちがこのレベルの大学に行っている、といったものをデータとして出せるよよいと思います。

松川教諭…出題形式などは異なりますが、「TOEFL Junior」を活用することで、英語をどれだけ使えるかという能力が比較的正確に分かります。実は大して英語ができないのに、英検があったら受かってしまうこともありえます。TOEFL Junior」では、その生徒の英語の真の実力を見ることが

学入試過去問題に取り組むことが主になりますね。私は東京大を目指すクラスを担当していますが、生徒たちに毎回英語でスピーキングをさせています。常に生きた英語が使える反射神経がないと難関大突破は厳しいです。共通テストも同じで、基本的には「話せる人が高得点を取れるようなテストに変わってきています。

渡邊教諭…1年生の授業もリスニングとスピーキングを中心に授業を組み立てています。生徒は「自分の考えを話せている」というのが楽しく、達成感があるようです。知っている情報と言葉を使って話すので、ただの会話じゃなく、ちょっと上のレベルで話せているという感覚です。それが自信につながります。

中田教諭…TOEFL Junior」を取り入れたのは、ネイティブの感覚がないとスピード感のある理解ができないといった部分をどうにかしたいという思いからでした。方針をガラリと変えた

できるといふ実感があります。本当に使える英語力がある生徒の方が、3年生になって受験英語でも伸びが大きい実感があります。

「TOEFL Junior」で得られたデータをどういう形で生かしていくのか教えてください。

下田教諭…私は2年生担当ですが、データを整理して1年生から2年生にかけてどう伸びたのか、なぜ上がったのか、というのが見える形にまとめています。それを進路面談で使ってもらいたいという考えです。本校ではほぼ日常的に教師と生徒が面談をする環境にあるので有効だと思えます。見えてきたのは、受験に必要な細かい暗記事項をやっていないけれど、授業で実践していることはできて使えるようになってきている。という子たちの存在です。そういう子たちを見つけてスクリーニングのような形で使えると思えました。逆に定期テストの成績はいいけれど、TOEFL Junior」は

2019年、あの時点で判断したことが大きかったです。現在、英語コミュニケーション・口は、日本人の教員が担当する授業でも「オールイングリッシュ」です。加えてディベートやプレゼンテーション中心のALTの授業もあります。

実践的英語力という意味で、TOEFL Junior」で力を測っています。問題の質が英検とは異なるのも大きいですが、**松川教諭**…生徒には英検が最も知られていないので、進路担当の立場としては、まずは英検を、となります



ALTによるオールイングリッシュの授業。生徒たちの表情も明るい。

あまり振るわない生徒もいます。そういう子たちに対する、より適切な指導や、モチベーションを高めるところに活用できるのではないのでしょうか。今の2年生は初めて2回受験した学年ですので、これからデータを積み上げていきたいと思っています。

松川教諭…全国の地方の学校が共通テストで苦しんでいる中、わが校はなんとか持ちこたえられている気がします。「将来を見据えた英語の運用能力」と「受験に合格する英語力」の両輪をきちんと回していくことが肝要です。

「最後にメッセージをお願いします。

佃教頭…英語教育だけではなく他の教科にも当てはまりますが、先生たちが次の授業や、その先の授業に向けて話している場面をよく見かけます。先生たちが同じ方向を向いて生徒に対して向き合っているという強みは、熊本高校である

ゆえんなのだと思っています。時代に合わせてアップデートしつつ、これまで育まれてきた伝統をしっかり守っていく。そういう部分を持ちながら、教育活動は続いていくものだと考えています。

熊本県は、熊本高校をはじめとした公立校が進学校の上位に名を連ねる地域だ。そのトップともいえる熊本高校での英語教育の取り組みは、いずれ教職員の異動などに伴い、県内各地の高校に波及していくだろう。TOEFL Junior」の導入に象徴される、「受験英語」からスピード感のある「使える英語」への改革は、地域の教育をどう変えていくのか、興味深く見守りたい。

